

バスが行く

作 池窪弘務

登場人物

ゆめ

うた

平三郎

音吉

運転手

幸助

孝之

六目(ろくめ)さん

おゆう

秀雄

風やん

おきよ

旅役者(男)

旅役者(女1)

旅役者(女2)

旅役者(子供)

警官(1)

警官(2)

算盤隊

通勤客

城東館の支配人

司会者

孝之を送る人々

城東館の客

背後の声

母の声

子供の声

うた(少女の頃)

舞台中央の奥が少し高くなっている。劇中、バスの中、ステージ、家、その他と場面に応じて設定が切り替わる。黒い幕で開閉できるように。この空間を以後は、『奥』と略す。それ以外は、椅子、机などの簡単な装置。西暦2045年。現代より約五十年後。

『奥』(ボリスボックス)で若い警官(1)がコンピュータのキーを叩いている。時々風の音が混じる。

警官(1) 西暦2045年。二月十一日。大阪城西の丸公園の鳩三十匹。昨日より二匹減。行き倒れの凍死者本日なし。あ、まちごた。いたはった、約一名。約はおかしいな、一名と。ビルの屋上からのパラシュート降下遊び五件。罰金として一件につき十万円、計五十万円徴収。うち二名は突風にあおられ転落死。処理料、一件につき二十万円。計、五十万、あ、また、まちごた。(指を広げて勘定する)ええっと、四十万円追加徴収する。落とし物人工眼球二個。タッチワイフ五体。夢の缶詰一個。(観客の方をみる)。夢の缶詰で、なんやて? 説明するより、想像するほうが楽しいのどちがう? ヒントでヒント、二十一世紀に売ってまよ。よいしょと、警察日誌はこんでええやろ

年配の警官(2)登場。警官(1)はボリスボックスから出てくる。

警官(2) 敬礼をして(1)苦労つさん。

日誌書けたら交替しようか。(空を見上げる)ああ、また、飽きもせんとビルの壁を上がって行きよるなあ。

警官(1) 過疎の都会に遊びに来てくれる

んはええけど、落ちんといて欲しいなあ後の始末が大変や。

警官(2) 郊外で、年金で気楽にくらしたらええのに。

警官(1) 年金生活者、失業者、浮浪者、警官以外に一体、誰が働いてまんのやろ?

警官(2) 地下十階ぐらいまで、警らに降りて行ったら、かすかに「コー」という音してるやろ

警官(1) 変な音してますなあ

警官(2) きっと、あれが四六時中働いとるんやろ。

警官(1) 警官(2)と肩を並べて空を見る(ほんまに、大きなジャンクルジムですね。

警官(2) 生きる目的失のた大人が命がけで遊んでるんかいな。

警官(1) 先輩は生きてる目的ってあります?

警官(2) …。

警官(1) 生きてる目的ちゅうのがなかったら、生きてたらあかんのやろか? なんや、肩身の狭い気がするなあ。

下手から、一様に黒いフードつきのコートに身を包んだゆめ、うた、平三郎、音吉が、ガヤガヤ喋りながら、よたよたしながら登場。舞台中央で、固まって客席の方をポーと眺める。

警官(1) あの人ら、あそこで何してるん やろ?。

警官(2) バスを待ったはるんや。

警官(1) バス…。

警官(2) 浮見町、長老会の人や。

警官(1) えらい年の人やなあ。みんな百才いつてるみたいや。

警官(2) 温うなったら、毎日、来はる。お堀のそばで大阪城眺めて、弁当食べて、四方山話を思い切りして、あそこで、ちよつとの間来る筈ないバス待つて、明日来うへんだら笑うたつてやあて歌いながら、帰らはる。今日集まったはんのは、特別な日やからやろ。

警官(1) 特別?

警官(2) 建国記念日やがな。

警官(1) アッハ…。

警官(2) おかしいか?

警官(1) いいや、別に…。それにしてもバスやて。

警官(2) 昔はここに電車が走ってたんや。わしはまだ生まれてへんけど。

警官(1) 電車、地面に電車。えらい不合理や。

警官(2) この坂をチンチン発車しまーす言つて、ゆっくりと坂を上がつて行く姿は、大きなカフト虫みたいやつたて大阪今昔物語に書いたある。電車が廃止されてバスや。バスはわしも覚えてる。浮見町は大阪の真ん中にあるのに地下鉄や電鉄の駅から便利が悪うて、長い間バスだけが頼りやつたんや。

警官(1) ほんで、ボケた年寄りはまだバスがくる思つて待つてますんか。

警官(2) バスを待ついつんは、あの人らにとって、遠い昔を思つ事なんやろ。それに、一つの儀式のようなもんなんやろなあ。それがボケてる言われるんやつたら、そうかもしれへんけど…。

警官(1) もう直ぐあの世に行く人の生きてる目的ちゆうのはなんやろ?。聞いてみよかなあ。

警官(2) 喋るこつちや、笑つこつちや、泣くこつちや、そない言わはるに決まつてる。

警官(1) ……。

警官(2) 滅多に帰らへんけど、わしも、浮見町の出や。後五十年もしたら、わしもあないして、バス待つてるかもしれへん。警官(1)を見てあんたらは、何を待つんや?

警官(↑) ……。ほな、引き継ぎしましよか。

警官二人ボリスボックスの中に消える
四人舞台中央、前にでる。

ゆめ あっ、見てみ、鬼がいるわ。

平三郎 石垣の上に座って「うち見とる。

ゆめ 鬼が見えるときは運がええんよ。

平三郎 苦しまん、口と、死ねまっか。

ゆめ 鬼は、年寄りが見る幻なんやろか。人の心を映す鏡や言う人もいる。

音吉 わしは、鬼なんか見たない。

うた バスはまだかいな。冬は寒いと決まっているのに、日溜まりはほかほかぬくつて眠となる。

うたが座り込み、「じっくり、じっくりとふねをこぎ始める。

ゆめ うちもはよ去んで、おこたで寝よ。手を合わせて(今日も一日生かしてもうてありがとさんでございます。

平三郎 まだ一日おわってへんで、いしなんどき、「アッといくやら分からへんがな。せやけど、去にとうないなあ、去んでも、邪魔者やし。嫁はいけずするし。ひ孫は、昼寝してるわしの頭の毛を抜きよるし。

ゆめ 抜くような毛おまんのか。
平三郎 ツードをとる(なにいつてんねん、「アッ、四五本おまっしやろ。

ゆめ ああ、ほんまや。

平三郎の頭の毛をゆめ一本素早く抜く。

平三郎 あいた、こらばばあ、わいの毛返せ。

ゆめ、毛をふーと吹き飛ばす。

平三郎 あああ、貴重な一本が消えてしもた。

四人、黙って客席の方を見る。突然、オナラの音。

ゆめ かなんなあ、また、音さんや。くさい、くさい。

平三郎 うちの嫁の屁もほんまに臭い。

音吉 うちのタマの屁も臭い。

平三郎 タマで猫の…。

音吉 そつや。

平三郎 猫に屁がまされたんかいな。

音吉 こたつでうとうととしたりしたら、鼻先でプス。臭いのなので、あいつら野菜たべへんよって。

ゆめ 平さんとこの嫁とどっちが臭い。

音吉 そら、比べてみな分からへんわな。うちのタマもって行きまひよか、それとも、そつちの嫁はんもってきはりまっか

ゆめ しょうもな。音さんは、こんな話ばかり。

音吉 ああ、そつや、みんなに今日は、今日は話そ思つて、忘れてたわ。わしタマに小便かけられた話でん。

平三郎 また、タマかいな、猫に小便やて。

音吉 な、な、珍しいやろ。タローが。

ゆめ 十年飼つてて、いまだに飼い主に吠える隣の犬の名前やなあ。

音吉 そつや、そのタローや…(絶句)

平三郎 タマに小便かけられた話や。

音吉 せやせや、タローがタマを追いかけてよってん。タマは必死になって逃げて、それでも、あの阿呆のタローお家まで上がりよって、タマは壁をダーと駆け上がって、窓に飛びつきよったと思つたら、ジャーと。

平三郎 何でそれがおまはんじ?

音吉 わし、その下で口開けて寝てましてん。平三郎 ……。

音吉 世の中広しと言えども、猫に小便かけられたんは、わしぐらいのもんやおまへんやろか。今まで百年何んも自慢できるもんはおまへんだけど、これだけは、他のもんには真似でけへんで

ゆめ 平三郎 しょうもない。

ゆめ あれ、あれ、しょうもない話ばかりするよって、うたちゃん寝てもうたやん。

平三郎 バスもきやへんらしいし、ほな、いつもの歌うたいながら、ぼち、ぼち去のか。

ゆめ 帰るで、うたちゃん。

ゆめ、うたの肩を揺する。うた大きくのびをする。平三郎、音吉下手にゆっくりと歩きながら歌う。その後ろから、ゆめが続いて歌う。

平三郎 音吉 ゆめ 明日来うへんだらわるたつてや、ええとこ行きよつたいつて、わるたつてや、向いつへ行つたら、みなによるしゆつゆつといて、その内わしらも行くよって

うた ゆっくりと立ち上がる。

うた (客席の方を見ながら、目をこすり) あれえ、バスがきよった。まだ、夢みてるんやろか? 陽炎がたつてる。その中をバスが揺れるようにして、やって来よる。ほら、ほら (客席に向かって指を差す)。

ゆめ 陽炎やて、阿呆な、この寒空に…せやけど、ほんまや、ほんまや、バスがくる。

バスの音が段々近づいてくる。全員呆然としてバスを待つ。

バスが停まる音。奥『バス』に、平三郎、音吉、ゆめが乗り込む。下手に運転手が背中を向けて腰掛けている

平三郎 浮見町まで、四人。みんな、老人パス見せや。生きているうちにバスに乗れるやなんて思いもせえへんだ。

ゆめ うちがパスや、顔見たらわかるやろ。えらい年寄りの運転手さんやなあ、大丈夫かいな。

平三郎 (大きな声で) 浮見町まで、じじい一人に、ばばあ二人。

運転手 へい、始めから終わりまで、みんな浮見町や。

ゆめ なに言うてんのやろ?

運転手 発車!…!

平三郎 ちよつと待って、うたちゃんなにしてるんやはよ乗らんかいな。

なんぎやなあ、ほんまに。自分が乗るのを忘れて、外で手ぶってるがな

平三郎、うたの手を引き、バスに乗せる。

ゆめ グズ

うた (即座にうたの顔を見上げて) プス。

バスの扉の締まる音。

ゆめ うち窓際がええ。

音吉 (床に座り込む) わしは、床にへたったほうがええ。

うた うちは、一番後ろのひろーくて、なががい席がええ。バスの揺れに合わせてひと眠りしよおと。

バスが動きだす音。

ゆめ バス乗んの何年ぶりやろ

平三郎 高校の一年は電車で後二年はバスやった。

ゆめ お堀の近くの有名高校?

平三郎 いや、もつちよつと向う。言わさんとときいな。

ゆめ あ、大阪城の天守閣に夕日が落ちて行く。きれいやなあ
うた ビルの谷間のお城はほんまにかわいそつなくらい小さいわ
ゆめ あれ、うちら何処から大阪城を見てるんやろ？

平三郎 なんやよう見たとこやと思たら、浮見町に帰って来てるがな、
乗ったと思つたら、もう降りな。

運転手 お降りの時は、ボタンを押してください。

うた いやや、もっと、乗ってたい。いままで、何日待ったと思てんの。

ゆめ、音吉 せや、せや。

平三郎 そんなむぢやな、浮見町を通り抜けてしまふがな。

運転手 終点まで行つても、浮見町や。

音吉 そういつたら、町内をぐるぐる回っているみたいやなあ、このバ
ス。

運転手 浮見町巡回バスです。

平三郎 それやつたら、安心や、小さい町やよつて、何処で降りても直ぐ
に帰れる

平三郎、窓から外(客席の方)を見る。

平三郎 都市の中の過疎の町か、四十年前は考えられへんだことや。何
で、こんな事になつてしもたんやろ

ゆめ、窓(客席と反対の)に張りつくように外を見ている。時々首
を傾げる。

音吉 ドーナツ現象や言つてた。ほんで、真ん中が空なんやて。

平三郎 最初に道路がパンクしてしもた。なんぼ、電波が発達しても、物
が滞つたら、なんもならへん。

音吉 えらい罰金とつて、市内の自家用車乗り入れ禁止。あのへんから、
みんな、都市から、ちよつとずつ離れて行きよつた

平三郎 人が集まるから都会や、それがのうなつたら、空気は汚いし、や
かましいし、住みにくい場所や。それに、在宅勤務者の増加。

音吉 平さんもせやつたんやろ？

平三郎 定年までの十年ほどそやつた。在宅勤務いつより、在宅失業者
いつた方が当たつたと思つわ。

音吉 それでも、給料貰えるだけええわ。わしら、商売はいつへんにあか
んようになつた。

平三郎 一昔前は窓際いつたけど、わしらは窓もなかった。することな
いから、町内をぐるぐるするジヨキングばっかりしつた。

うた ほら、あのビルの上に、旧式のパラシュートつけて、ほら、飛んだ。命かけてなんであんな阿呆な事するんやろ。何であんなに死に急ぐんやろ。(ゆめに話かける)ゆめちゃん、なんか面白いもんでもあるの？

ゆめ返事をしない。おくり景色に合わせて、顔を動かす。

運転手 今日の新聞に、ホツカホツカカイロ一個で殺人とありましたなあ。

平三郎 よっぽど寒かったんやろ。せやけど、あんなもん慈善協会が撒くからいかんのや。やらへんたら、誰も欲しい言わへんやろに。

音吉 静かに凍え死んでいきますか。

平三郎 (ホッソリと)そんな意味やないけど…。

運転手 この間のドドド、舌まわらへんがな、テレビのドキュメンタリーで大阪府が撒く高カローパンも余計なお世話やいつてましたなあ。

うた、ゆめのそばに行つて、顔を並べる。

運転手 そのドキュメンタリーで、行き倒れの死体から、人工臓器を回収する府の職員の姿映してましたなあ。わしの身体にも二三個入つてるし、自前の胃や腸より愛着を感じる。それが又、他人の身体の中で動くと思たら、なんや、嬉しいよつな、さみしいよつな…。

平三郎 (ゆめ、うたの方を見て)なんか面白いもんでもあるんかいな。

ゆめ な、おかしいやろ。

うた そう言つたら、そつやなあ。

ゆめ たしか、去年、山田はんは、息子とこへ行つた筈や。

うた そつや、そつや、今は誰もいてへん筈や。

ゆめ もう直ぐやよつて、よつて見てみ。

四人が窓に顔を寄せる。

ゆめ ほら、やつぱりや。

平三郎、音吉 なにが？

うた ほんまや、見えたわ、洗濯もんが干したつた。

平三郎 帰ってきたんやろつ。ドーナツの実の方も大変らしいよつて。

ゆめ (独り言のように)せやけど不思議やなあ、さっき、お日さんが沈んだのにいつても町はくろつならへん。それに、何年か前の浮見町を見ているよつな気がするし。うちの目がおかしいんやろか？

うた あれえ、うち、なんか、若がえつたみたいや、皺が一本のびた気がするわ(うた、顔に手をやる)。

バスが止まる。ドアの開く音。幸助がバスに乗ってくる。

幸助 こんにちは、あら、あら、みなさん、おそろいで。

平三郎 幸さん、何処へ。

幸助 いや、ちよつと。

幸助 一番後ろの隅に腰を下ろす。うた、幸助と一緒に後ろの席へ行く。

音吉 あいかわらずやなあ幸さん。若い頃から無口や。黙々と自転車の修理してはったもんな。

平三郎 それに、意外におしゃれや、作業服が油で汚れているようなことはあらへなんだ。丸がりや、何時も、ジャイアンツの野球帽かぶってた。そういつたら、葬式の写真も野球帽かぶってたなあ。わしが酔つて、からんで、タイガースのいないかあ……。

ゆめ、平三郎の顔を覗き込む。うたは幸助にさかんに話しかけて、楽しそうに笑っている。

うた いややわ、幸助はんの助は助平の助や。

幸助 えへ、そんな……。

音吉 せや、せや、町内であいつだけがジャイアンツや。ジャイアンツの勝った晩、自転車屋の表を通ると、小さい音痴な声で、お経みたいな巨人の星歌うてやがった。自転車のチューブ水につけながら、思い込んだら、試練の道を……。

平三郎 あのなあ、音ちゃん……。

音吉 平三郎を無視して(夜伽に、供養になるいつて、いややったけど皆で巨人の星を歌わされたなあ。

平三郎 夜伽やろ、音ちゃん……。

音吉 平三郎を無視して続ける(それに、葬式の日には、息子さんがな養の溢れる音吉さんにだけ見てもらお言つて、古い茶色のペラペラの封筒を見せませんや、それに汚い字で、たからものと書いたんね。何んやと思つて)。ポロポロになつたけど、長嶋のサインやった。そう言うたら、むしろ昔ジャイアンツファンやったんやなあ。小学生のころ、あなたと背番号3を取りあいしたもんなあ。それが、何時の間にか、タイガースや、あれから、強い奴に随分いじめられもんなあ。

平三郎 よう喋りよったなあ、とりあえず今とは関係ないことを。

ゆめ それに、夜伽や葬式やいつて、なんにも思わへんねやろか。

音吉 思わへん……。

平三郎 あそこにいるのん誰や？

音吉 誰やて、幸さんやがな。

ゆめ 誰の葬式の話してたん。

音吉 幸さんや、ありや…。

平三郎 声を潜めて(ゆうれいや)。

ゆめ いや、違う。このバスがおかしいんや。町の様子が少しずつ変わって行く。ほら、あのローンは去年店閉めたはずや。信屋先生は医院を辞めはったはずやのに、看板が昔のままや。ちよとずい昔に帰っていく。信じられへんけど、バスは時間を遡ってるんや。みんな、降りよ、何処へ連れて行かれるか分からへんよ。

運転手 降りたら、二度と乗られしまへんで。

ゆめ 降りたらどうなの？

運転手 どこで降りても浮見町や。せやけど、バスは二度とはこうへんと思っ。そんな気がする

バスのとまる音。幸助がドアに向かって歩いてくる。

幸助 どなたはんも、お先に。

三人、幸助の動きをずーと目で追う。うた、後ろの席から移動。ドアの締まる音。又、バスが動きだす。

うた ほんまに久しぶりやった。不思議そうに皆の顔を見て(みんなではないしたん?)少し間をおいて(ああ、おかしい、平さんの頭、又、髪の毛増えてるわ。

ゆめ、音吉、運転手、一斉に平三郎の頭を見る。平三郎、キョトンとした顔をし後、頭に手をやる。そして、丁寧に髪の毛を一本ずつ勘定する。

平三郎 (弾んだこえで)わし、しばらく、このバス乗ってるわ。

暗転。バスの音。舞台薄暗く。

うた 時間を遡るバスなんやて。ほな、終点でお母ちゃんに会える。

音吉 ふん、お母ちゃんの顔も知らんくせに。その前に恋しい清次に会えるわ。

うた あんな奴に会いたない。

西暦 2020年。上手に男、女二人、子供(男)。女(↑)は赤ん坊

を背負っている。女(2)は、公園の洗い場の水道で食器を洗っている。男は、こんろで煮物をしている。子供は地面に絵を描いている。

ゆめ やつと夜になった。

うた あの人ら、誰やる？

平三郎 覚えてる、覚えてる、なあ、音ちゃん。

音吉 旅の役者や。いつのまにか、公園にいついてしても、困ったことやった。

平三郎 だあれも、面と向かって文句よういわんよって、わしが行ってん。

音吉 あんた、町内会の会長やった。

平三郎 あんたは副会長。

音吉 会長たてて、わしは行かへんだ。

平三郎 ほんまに、よう言つわ、調子のええことばかり……。ほんで、勇気だして行ったら、話は簡単についてしもた。町の人にそない迷惑かけてた思わへんだ。すぐにでも、引きあげさしてもらいます。その前に、迷惑かけてこんなこと言うのも心苦しいが、一回だけ興行させてもらわれへんやるか、もう、どこにも芝居するところあらへん、これが最後やと思っからという事やった。

音吉 『風の一座』いつてた。わしら七十五六やった。七十代の顔になったかいな？

平三郎 なった、なった、八十前の鼻たれ小僧や。

音吉 あんたも、真っ白やった眉毛が黒うなってきたわ。

平三郎 あの晩は、六目^{ろくめ}さんの葬式済まして行ったんやっとなあ。葬式は、バサバサの煎餅みたいに、全然湿ってへんだ。

音吉 わしとあんただけの葬式やった。

平三郎 六目さんは身体を殆ど機械に変えてたから、機械が故障したんか、六目さんが死んだんかよう分からんだ。

音吉 府の職員が来て、機械を回収して、ロソクの火をふつと消して、葬式は終わりやもん。外に出たとたん、稲妻が走って、雷が鳴った。あんたは、六目さんが、機械持って行かれて、わしの身体返せ言うてるみたいや言つたなあ。それにしても、よう、分からん、六目さんって、一体、何もんやったんやる？

平三郎 府の職員があの人には国民番号がない、言つてた。

音吉 代わりにあるんは、菊の模様やて。

平三郎 浮見町に天皇陛下がいたはった……。まさか。

音吉 わし、よう回覧板持っていったもんなあ。

暗転。『奥』に幕。稲妻が走る。激しい雷鳴。下手から平三郎、音吉

が出てくる。

音吉 えらい天気やなあ。悪いけど、わし、帰りませ。

平三郎 なに言うてんねん。芝居や芝居。

音吉 約束しはったんは、あんたさんやから。町内会の会則に葬儀は手
伝うと書いたるけど、芝居を見なあかんとは書いてへん。

平三郎 ええもんあるんやけどなあ。

また、稲妻が走る。

音吉 はよ去なな、雨がきよる。

平三郎 これなんやと思う？(ポケットからカップ酒と煙草を取り出
す)。

音吉 菊正とロングピース。そんなもん、なんも珍しいことあらへん。

平三郎 1900年代のものや。

音吉 そんな肺癆になったり、悪酔いするよつなもんいらんわ。

平三郎 さよか、せやったらええわ、さいなら。

音吉 平三郎の袖をひっぱる(ちょっと、待って、ほんまもんかいな？。

平三郎 まあ、悪酔いしてはじめて分かるやろ。あんたの店には売ってへ
んわなあ。

音吉 あっ、降ってきよった。

雨の音。雷鳴。

平三郎 音吉の手を引っ張る(さあ、はよ、入ろ。

平三郎 だあれもいてへん。

音吉 今時、芝居なんてなあ。大きなテレビもあるし、気が向いたら、自
分も参加できる劇もあるし。

平三郎 まあ、文句言わんと、つきおつてえな。(酒をつぐ)まだ、なんぼ
でもあるんやから、(あちこちのポケットから、何本もカップ酒を取り
出す)。

音吉 ほんま、あんたのポケット、養老の滝やなあ。

平三郎 煙草も吸い。

音吉 おおきに、せやけど、ええんやろか。

平三郎 灰皿あるから、かまへん。それにしても、誰もこんなあ。こんな
天気やし、しゃないなあ。(これつまみにして(服の裏から弁当を出す)。

音吉 なんでも出てくる服やなあ、今度は小遣い出して。

平三郎 それはおまへん。

音吉 なんか、楽しゅうなってきたなあ。酒も旨いし、煙草も旨い。ねえ

ちゃんはおらんかいな……。そら贅沢やとして、今の酒や煙草は、無書で、味も香りも昔のんと全くいっしょやいっけど、何んかがやっぱりちやっ。

平三郎 そや、楽しみいつんは必ず、ちよつとは毒含んでるもんなんや。

稲妻が舞台の幕に走る。雷鳴。激しい雨の音。柝が入る。幕がゆっくりと上がる。国定忠治、赤城山の場。

忠治 刀を見上げる(赤城の山も今夜限りか。かわいい子分のおめえたちとも、別れ別れになる身空だ。

平三郎 劇の劇は劇薬の劇やで。

音吉 せや、夢には覚めるといつ毒がある。

平三郎 覚めない夢は？

音吉 見ることがでけへんか、永遠に見続けな、しゃない。

笛の音が入る。

忠治 雁も西の空に飛んで行かあ。

子分 親分。

平三郎 日本一！！

音吉 大統領！！

また、稲妻が光る。そして、六目さんの巨大な影が浮かぶ。

音吉 あっ、六目さんや。冥途から帰ってきた。

六目 身体のだろを機械に置き換えられて、それでも生き続けるといふことは辛い事だった。もし、心といつものがあるのなら、それはいつも夢の中をさ迷っていた。夢の中でしか生きられなかった。

影が忠治の方を向く。

六目 (しばらくですように)よおおおつ……日本一……。

幕が一気に降りる。同時に影も消える。平三郎、音吉、舞台にかげより、幕を上げる。

平三郎 誰もいてへん、誰もいてへん……。

音吉 うっ、気分が悪うなってきた。きたきたきた、きよった、長い間忘れてた悪酔いがきよった。

平三郎、舞台の中央で、念治のように刀をかざす。そして、六方を踏む。

音吉 舞台上に座りこみ（よお、くいとぶるうー）。

暗転。平三郎、音吉、座り込んでいる。

平三郎 わしな、長いこと生きてきて、今だに自分の顔知らんような気がする。

音吉 男前やで、あんた。

平三郎 鏡覗いても、これがお父さんの平三郎や、これが真面目だけが取り柄の經理の平三郎や、これが人のええ浮見町の平さんや。いろいろ思てるうちに、自分の顔がどんなんや、分からんようになりよる。

音吉 みんな、あんたや。

平三郎 自分やないとあかんという事がないような……。

音吉 大学出はむつかしいことを言う。わしら、何回鏡見ても、酒屋の音吉や。

平三郎 なあ、音やん。

音吉 はあ。

平三郎 あの時、六目さん、生まれて初めて、腹の底から、自分の声出したんとちがうやるか？

音吉 死んで初めて自分の声が出せるか……少し間をおいて（よおー）

平三郎 日本一。

バスの場面に戻る。上手に孝之さんの銅像。雪がちらほら舞っている。きよ子、下手から登場。銅像の周りを掃除しはじめる。登場人物は若返っている。

運転手 この辺りは四丁目。浮見町の真ん中ですか？ちよつと車止めよ。

ゆめ 傘をじつと見ながら（少しずつ皺が伸びていく。あれ、うたちゃん、きよ子がいるわ。）

うた あつ、ほんまや。今朝、大阪城へ来るときも嫌味いわれたんや。

ゆめ なんて？

うた 年寄りに、寒さは禁物、堀に落ちんようにきいしけなはれやて。

ゆめ そんなん言いながら、（こみをあんたとこの表に掃き出しよるんやろ。）

うた ほんまに嫌なやつ。いかず後家。

ゆめ ちやうちやつ、あれはいけず、行きとつても行かれへんちゆう意味

のいけず後家や。

うた あんな根性やったら、男はよってこんわ。それに不細工やしええとこなしや。

ゆめ せやけど、なんで、孝之さんの銅像の掃除してるんやろ。いつもは町内の事なんにもせえへんのに。

運転手 ほお、あれが、孝之さんの銅像でつか。

平三郎 浮見町でたった一つの観光資源や。

ゆめ 二十一世紀の最初の戦争の、日本でたった一人の戦死やもん。

平三郎 あの時、町中が熱に浮かされたみたいやつた。

うた ほんま、えらい騒ぎやつた。日本から国連平和軍に参加して、異国で倒れた、若き英雄いつて、テレビや新聞がようけ来た。

音吉 泣かなあかん親父さんが、まちごと、カメラに向かって、ピースつてやったもんなあ。

銅像が肩の雪を払って、壇から降りてきて。バスに向かって手を上げる。

運転手 へい、すぐ開けるよつて。

四人声を揃える。 孝之さん????。

平三郎 ころ矛盾や。銅像が立ってるのに。

孝之 ゆうれいや、僕。

うた きゃあ、おぼけ!!!。

孝之 大きな車やなあ思て、中見たら、うたばあ見えたよつて、なつかしうて。

うた こんな若うなつても、まだ、ばあさんか。まあ、ええわ。このバスもおぼけみたいなもんやから、おぼけが出ててもびっくりすることないわ

運転手 これが英雄でつか。ちよつと間が抜けてるみたいやけど。

ゆめ 小ちゃい頃は、野球帽反対に被って、箒がついで、パンパン口でいつて、大通りはよつ走らんで、路地をばつかり走つとつた気の小さい阿呆や。

孝之 なんや、ゆめばあもおつたんかいな。降りよかなあ。

運転手 新聞には、小学、中学、高校を首席で卒業、東大に入学て書いたつたけど……。

孝之 東大の横に小さい字で予科と書いたらしませんでした？

運転手 予科？

ゆめ 予備校のこつちやろ。

孝之 なんや馬鹿にされるために車に乗つたみたいや。降りよ

平三郎 まあまあ、こつちへおいで。ほんで、また、なんで迷たはりまんの？

孝之 なんでかしらん、このへんをうろついてますね。ただ、あの銅像を

見るんがっつろつて。

うた　なんで？あんたは町内の英雄やで。音さんなんか、サインしてもらお思て、ポケットにひっくり返してるやんか。

音吉　あった、あった、くしゃくしゃの紙を出す（鼻紙しかないけど）。

孝之　サインやなんてとんでもあらへん。本当の話きいたら、僕のサインなんか、お尻ふくのにも使わへんと思う。

平三郎　本当の話？あんたはあの戦争で名譽の戦死を…

孝之　嘘や、なにもかも嘘や。死んだちゅうのはほんまやけど。

ゆめ　なんか言いたそうやなこの子。聞いたげるから言い。

孝之　町内のみんなに送られて、僕も決死の覚悟やったけど、飛行機に乗ってびっくりした。ファーストクラスやつてん。

ゆめ　ほな、一般の人と一緒にいな。

孝之　そうや、修学旅行の女子高校生と一緒にやった。手が痛なるほどサインした。日本からの志願兵は五十人ぐらいやった。みんな、不安そうな顔してた。いちびってごんときゃよかった言つて愚痴こぼす奴もおつたし、女の子の志願兵に、ぼくまだ童貞です、死ぬ前に一回させていうて泣きついてる奴もおつたし、ずーと窓の外見ながら泣いてる奴、マンガ読んでる奴、サービスのワインで、急性アルコール中毒になった奴、下痢でトイレを占有し続ける奴。夜になると高校生が兵隊さんを慰めに来てくれはった。けなげやるほんまに、せやのに、皆あかんだ。しゃないからおっぱい吸うてた。ファーストクラスのあっちゃこっちゃで、チュウ、チュウ、チュウ。

音吉　ほら、チュウ、チュウ、チュウ。

孝之　覚えてるわけないけど、おかあちゃんのおっぱいみたいやった。僕とこ来てくれた娘は僕の耳もとで、あんた上手やあって、ほめてくれた。

平三郎　ほんまに、けなげなんやろか？

音吉　ほら、チュウ、チュウ、チュウ。

孝之　すんません、もう、終わってますね

ゆめ　とにかく戦場へ行ったわけやね。

孝之　戦場？そつえば、戦争やったんやなあ。間（間）戦場なんか、遠い場所やった。後方の後方の、もう一つ後方。危険な物は前の部隊が根こそぎ取りはろつてくれはった。部隊の隊長は口癖みたいに、辛いことあらへんか、欲しいものあらへんかて聞くし、疲れたら、リゾートの島を用意してあるから、何時でもどうぞ。もし、帰りたいければ、直ぐに手配します。それに、勳章は今ハバーゲンで大変お買い得。

平三郎　えらい、気楽な戦争やなあ。

ゆめ　テレビで見た国連平和軍は目がキラキラしてて、気楽そうに見えるへんだけ。

うた　服も汚かったし、痩せてた。

孝之 ああ、あれ、あれは国連平和軍とちゃう、テレビが間違ひよってん。ぼくらはあんまり後ろにいたから、取材班が追い抜いてしもてん。あれは開放軍や。ほくも大きな望遠鏡で見せてもったけど、子供みたいな兵隊やった。いいや、みたいとちこて、子供や。

平三郎 あれがほんまの兵士か。

孝之 テレビに映った後、あの部隊全員戦死しやて、アッハ

平三郎 こら、なにが可笑しいね。

孝之 おこらんでええやん。僕のせいやないんやし。

平三郎 笑いごとやないやろ。

音吉 おこりな平さん。孝之が悪いんと違つ、この子らとわしらは何かがずれてるんやから。

平三郎 人間同志、なにもずれるものなんかあらへん。

ゆめ それが、ずれてるんや。

平三郎 ずれてる、ずれてるて、ゴムの切れたパンツみたいに言いやがつて

孝之 猫や

音吉 猫の話やったら、わしや。猫に小便…

ゆめ 音さん、ええかげんにし、猫がどないしたん？

孝之 女の子が狂て、猫を撃ちよった。せやけど、猫はにゃんともなかつた。

平三郎 (孝之の頭をポカリとたたく)

ゆめ よういわんわ、猫相手に戦争か。

孝之 ほんで、ぼくらの持つてる弾が本もんちゃうのが分かった。英語やけど、簡単やったから、その娘が言つた意味が分かった。きれいな金髪なびかして、猫も殺せへん戦争てなんやねん、叫びよった。

音吉 金髪がなんやねんて言つたんか。

孝之 ほんで、指揮官の銃ひつたくつて、猫をバーン。

音吉 猫が名誉の戦死かいな。

孝之 みんな、銃をほかした。ほんで、三十分後、また、その銃を担いだ。なんやしらん、同じ善やのに、ほかした銃より重う感じた。

音吉 猫や、猫の亡霊がついたんや

孝之 その猫を担いで…???もつ、ややくしいとて言つよつて、こんがらがつてもたやん

音吉 ……

孝之 僕、缶けり教せたつてん。それをみんな面白がつて、朝から晩まで、やった事もあつたわ。白いのや、黒いのや、黄色いのが、ちいぢやな空き缶に必死になつて…。ほんで、毎日、遊んでるうちに、ある日、突然、戦争が終つた。

平三郎 終つた？あんだ、死ぬ時あらへんや。

孝之 ションちゆう犬みたいな名前のアメリ力人が、地雷を見つげよつ

た。道の真ん中に落ちてたんや。ほんまものと違うのは明かやった。それは、おおきなウンの形をした。おもちゃやとジョンは言いよった。おまけにTOYと書いたあった。孝やね、ジョンが言った。それが周りに広がって、みんな集まって、れいのやつを孝やねの大合唱や。ゆめ 何をやれて？

孝之 ぼく、音痴やし、何にも芸あらへん。パーティーの時、えらい困って赤のふんどしいつちよで走ったら、それがえらい外人に受けてん。

平三郎 ふんどし、えらいもん持っていってんなあ。

孝之 ぼくの趣味やねん。

うた よういわんわ、いやらしい。

音吉 うたちゃん、知ってんの？

うた (かぶりをふる)しらん、しらん。

孝之 バスを降りる。上手でふんどし一つになる。孝之、ヘッドバンドを巻き、日の丸をさす。

孝之 (股をさわり)かわいらしいのが顔だしてへんかを確認してと。(上

手から、下手へ走る。)

孝之 天皇陛下万歳。(倒れる)

平三郎 おもちゃの地雷の上に倒れたんか？

孝之 (立ち上がる)ほんで、真っ白になった

音吉 ほんもんやったんかいな。

うた ぶっ 吹き出す。

ゆめ うたちゃん。

うた あいた、なんでつねんの。

平三郎 それで、名誉の戦死。

孝之 みんなまだ笑たまんまの顔しとった。顔の筋肉が直ぐにもどらへんだんやろな。その顔の上に、ぼくの、肉や、血が、パタパタと落ちよった。(肩を落としながら、銅像のあった所を見上げる。)

孝之 りりしいええ顔しとるなあ。ぼく、一生でこんな顔したこと一回もなかったやろうなあ。(バスの方を見る)みなはん、お願いや。この銅像、壊して。

平三郎 気にすることあらへん、嘘でもほんまでも、銅像になったら、みんなおしまいや。事実なんかなんの意味もあらへん。

孝之、上手から消える。雪が激しく舞い降りる

運転手 英雄やろうな。とにかく、戦争に行ったんやから。孝之はん恥ずかしがることあらへん。

平三郎 そういつたら、わしらは戦争の知らない子供たち言われた時もあつたなあ。

ゆめ それから、団塊の世代。

平三郎 セヤけど、いつも勝たないかん言われ続けてきた気がする。

運転手 いつも戦中派でんな、ぼくら。

ゆめ ちようちんの真ん中、数ばっかり多おて。

平三郎 最後までわしは平社員やった。

音吉 そのの方が気楽でええがな。

平三郎 やっぱり、戦争よりはええか。

旗を振る人々に送られて孝之、出征の姿で上手から登場。

ゆめ あ、孝之さんの出征や。

うた 孝之はん、行ったらあかん。孝之さんがかわいそうや。

音吉 わしらが送り出したんやろか

平三郎 わし、旗振って、万歳言つた。

うた うちも言つた。かんにん。人間ってアホやなあ、21世紀になっても何もかわってへん。

平三郎 世界正義に踊らされて名譽の戦死。ほんで、死んだ後も、英雄といつ名前で、踊れ！、か。むごいなあ。

孝之、バスに向かって敬礼をする

うた あつ、孝之さんがうちらにむこうつて、敬礼をしたはる。

音吉 わしらもしたる。な。

平三郎 ええ顔してるやんか。

ゆめ あれ、おきよがあんなとこで泣いてる。

うた 目にごみでも入ったんやろか。

ゆめ そんなこと言つたりな、可哀想やないの。

バスの中の五人、敬礼を返す。暗転

バスの上手に、上谷が腰掛けて、ほんやりと送り景色に目をやって
いる。

運転手 今日は変わった物見えまっか

上谷 いいや、昨日とおんなじや。

運転手 今日は、大阪城の天守閣に鬼がおりまっせ。

上谷 昨日もおつた。おとといもおつた。いいや、ずーとあそこにおる。

音吉 声を潜めて誰や？

平三郎 上谷三郎。

音吉 しらんなあ。

平三郎 大阪市の公務員の人数を半分にした、伝説の人物や。

ゆめ あの人が首切り三郎かいな。

平三郎 最後は自分も合理化されてしもた。

上谷 (突然立ち上がる) 3人かかった仕事を一人！算盤、電卓、書類の追放、システム！そんな考え方は、論理的やない！

バスの止まる音。ドアが開く。観客席五人の男女が算盤を振りながら乗り込んでくる。振る算盤の音。ザッ、ザッ、ザッ

ゆめ なんや、この人ら、みんな片手に算盤もって。

平三郎 あっ、山本さんやないか。松本主任。有本課長もいたはる、よう見たらわしもいてる。

男(A) あっ、わしらから仕事奪うた上谷がいよる。ザッ、ザッ、ザッ

上谷を取り囲む

男(B) わしらの仕事を返せ。駅の改札口をわしらに返せ。ザッ、ザッ、ザッ

男(C) 面白かった仕事を返せ。ザッ、ザッ、ザッ

女(A) お茶くみの仕事を返せ。ザッ、ザッ

男(A) 算盤を返せ。何年もかかって掴んだ技を返せ。誇りを返せ。ザッ、ザッ

男(B) 家に帰って飲む、一杯のビールの旨さを返せ。ザッ、ザッ、ザッ
上谷 合理化や、合理化や、(叫ぶ)もう、あんたらは、みんな、いらんねん、(破算なんや(算盤の音、ザッ))

算盤の音一斉に止む。(間)。暗転

うた(声) みんな消えた

上谷にスポットライト。算盤隊が落としていった、算盤を拾う。そして、振る。ザッ。暗転。

運転手 二十世紀に入ります

平三郎 新しい世紀か……。えらい大きな区切りや思うたけど

音吉 水溜り、ポンと飛越える程も、なんも変わらへんだ

平三郎 なんやこれは。

全員 わあー地震やあ。

ゆめ 阪神大震災や。

音吉 ふつ、やっと収まった。

うた うちらは大したことなかったけど。神戸は大変やった。

平三郎 みんながんばったもんなあ。二十一世紀には、神戸は首都や。

音吉 総理大臣はくじ引きやけど。

明るくなる。次々に人が乗り込んでくる。(声だけでも可)

平三郎 えらい込んできたなあ。

ゆめ みんな黙って、吊革にしがみついている。

音吉 通勤ラッシュが

男(A) いややなあ、会社行くのん。

うた なんやて、平三郎さん何か言った。

平三郎 いいや、何も言うてへん。

女(A) もうじき三十や誰か男おらへんやろか。

男(B) 嫁はん、口ツと死んでくれへんかなあ。

男(C) あの女きれいな。

男(B) どっかに金落ちてへんやろか。

男(D) 課長になりたい。

男(E) 浮浪者になりたい。

女(B) 今日もあの人に会える。会社はええわ。大好きや。毎日が恋愛。

平三郎 わしにも聞こえた。喧しいなあ。

男(F) 昨日の忘年会で、酒のみ過ぎた。なんも分からんようになってしもた。へんなことしてへんやろか。会社に行くくんが怖い。

男(G) 今晚は、30番行つたる。& & タラ、タラ、タラ、& おめでとーいじやいます、88番ラッキーフイバー。

女(C) 誰、お尻さわるのん。

女(D) 映画でも行くつかなあ、治でも誘お。せやけどあいつ、金持ってへんしなあ。

女(E) この女、昨日餃子食べたな。

ざわめき、一斉に止む。バスの停まる音。暗転。

音吉 北斗七星が見える。

うた あの大きな柄杓で水汲んで、空は雨を降らすのや。

音吉 天の川に水汲みに行かはるんやろ。

うた そつや。

音吉 ロマンチックやなあ。時をさかのぼるバスが銀河を渡っていくようや。

うた あんた似合わないことをいっ。

音吉 うたちちゃん、あんたは過去で誰に会いたい。

うた 誰ってやっぱりお母さんかなあ。

音吉 お母さん？。

うた 顔もしらんけど…。

音吉 焦って話を逸らすように(わ)は、わしは、昔のうたちちゃんに会いたい。

うた えっ？なんで。

音吉 なんでやて…。言い忘れたことがあるねん。

うた それやったら、今言ったらええやん。目の前にいるんやから。

音吉 今はいえへん。まあ、過去に帰っても言えへんかもしれんけど。石炭箱逆さまにしてその上に乗って、げんこつをマイクにして、りんご追分け歌うてた。

うた 歌(う)つ(り)ん(ご)の花びらが、風に散ったよなあ…。ゆめちゃん、あんたは誰に会いたい。

ゆめ うるさい。

うた うるさいって…。

ゆめ 誰にも会いたくない。

うた …。あ、朝日湯の煙突が見える。

ゆめ なつかしいなあ、親子三人で、よう、行った。あの頃が一番幸せやった。

うた 浮見町の石部金吉いわれるくらい固かった秀雄さんが何で博打になんか狂たんやろっ？

平三郎 酒も吞まへん、気の小さそつな人やったのに。

ゆめ 人間て、何がきっかけて、ころっと変わってしまうかわからへん。同僚の先生に誘われて、生まれて初めてパチンコをしたらったんや。

音吉 四十過ぎて初めてパチンコえらい人もおるもんやなあ。

ゆめ それが百円でフィーバー、神さんも、せつしよなことしはる。ものすごく興奮して帰ってきた。

うた 年いって、ぐれたら、怖いちゅもんなあ。

ゆめ 次の日からちよととず、帰りが遅うなって、来うへんて、学校から電話がかかったりして、そのうち、サラ金に来るようになった。落ちたしたら、速い、ほんまに速いわ。坂道に玉転がすみたいなもんや。そないして、うち、ばいと、おらんようになつた。

下手から秀雄がバスを追い抜いたり、抜かれたりして走っている。

秀雄 あの時分は夢中になるもんが何んもなかった。いいや、せやない、子供の頃からなんもなかった。秀ちゃんは、勉強できるよって先生がええわ、周りから言われて、先生になつたけど、子供がこおおてしやなかつ

た。年ごろになって、この娘はんどじや、聞かれて、まあ、自分もちんちくりんやから、これぐらいでええやる思つて、ゆめを嫁さんに、もろた。

ゆめ ちんちくりんで悪るおましたなあ。

秀雄 なんや、おったんかいな。

ゆめ うちも学校の先生やから間違いないやる思つた。パプルの真っ最中、三度の飯が食べられへん家があるやて、信じられる？病院のまかないやつて、残った飯、人の目盗んでおにぎりにして、家に帰って子供と二人で食べたんよ。子供のほつたに飯粒ついたんを、取つてやつて、口に入れたら、明日のこと考えんの忘れてふつと笑つた。亭主が働いてのんびりしてた頃は味われへんだ幸せやけど。

秀雄 走るの止める(どんな時も真っ暗はないんやなあ。

ゆめ よう言うわ人ごとみたい。せやけど、真っ暗や思た事はあつたなあ。生きて行くのが嫌になつて、子供の手引いて、線路の上歩いたんや。もつ、どつなつてもええ氣いして。せやけど、なんやしらん、急に腹がたつてきて、なんで、あんな男のために死ななあかんのや思て、ふと、見たら手の先に小さいのが、ぶら下がつてる。去のか、ほんで、今日は、ラーメンつくだる言つたら、嬉しそうな顔して、笑いよつた。あんたはお母さんとちがうんやもんなあ、お母さんが、あんたを殺す権利ないわなあ、心の中で言つて、自分の阿呆笑つた。

秀雄 色々理屈いつけど、結局は博打が面白かつたんやと思う。先が分からんといつことはものすいこ面白いつた。

ゆめ 勝手やなあ、それで、うちと子供を置き去りにしたんか。

競艇場の歓声。

秀雄 行け、行け、行きさらせ

秀雄 やつた、やつた、やつたで

背後の声 おっさん、よかつたなあ、おおもつけやないか

秀雄 舞台中央に肩を落として歩く。

秀雄 そんな氣もしたんやな。裏目ばかりや。昨日一日働いた金一銭もあらへん。また、野宿や。家へかえろか、帰つて、ゆめに謝ろつか。

ゆめ 人の倍働いた。そのうち、賄いの他に金貸しやつた。借りる時は拝むのに、取りに、行ったら、鬼のようについよる。遊ぶためのお金ばかりし、金かしの方がずーと貧乏やつた。

ゆめ あんた秀雄の方を見る(

秀雄 へーいゆめを見る(

ゆめ あんた、自分がどんな死に方したんか知ってる？

秀雄 首を振る(何時死んだんかも知らん。気いついたら、この世に来ててん。

ゆめ おらんようになって、最初の何年間はどう捜しに行った。おったという場所に行くと、昨日までとか、一週間前とか、結局、死ぬ時まで会わへんだ。捜しに行つて聞くあんたの話は、うちの知ってるあんたからは考えられへんことばかりやった。お酒のんで、客と喧嘩したとか、お金を盗んだとか…。初めておつた人やの親身になってあんなんとは、別れた方がええといつ人も、ようけ、いたはった。

秀雄 なあ、わし何処で死んだんや？

ゆめ 病院。

秀雄 てつきり野たれ死にや思てた。

ゆめ 野たれ死にの方がましちがう。

秀雄 …

ゆめ 病院に駆けつけると、あんたのベッドは、廊下やった。空の点滴瓶つけて、それに針も外れてた(自頭を押さえる)手を握ると少しあつたかかった。看護婦呼ぶと、洋子ちゃん、また、針外れてるやんつて、笑いながら言いよつた、うちは看護婦の横面思い切りはりとはした…。

秀雄 もう、ええ、いわんとして、堪忍や、わしは空の点滴瓶つけて、死にかけとつたんか…。みじめやなあ、ほんまに。

平三郎 博打の誘惑にまけんと、平凡に暮らしてたら、今は一緒にバス乗つてたかもしれへん。

音吉 バスの中で花札がええ、よそから取つたる思たらあかん。よそさんには、そんなに、あもつない。

秀雄 同じところをぐるぐる回るような毎日でも毎日が少しはちこて、幸せはそんな中にあつたんかも。子供は？えーと。

ゆめ あーあ、子供の名前も忘れたんかいな。元氣やで、あんたと一緒に学校の先生で、ちよつとも、道はずさんと、この前古希やった。

秀雄 それは、よかつた、ほんま、よかつた。すまんかつた、ゆめ、堪忍してや博打はもう、こりこりや。

ゆめ ええんよ、死んだ人になに言つてもはじまらへん。うち、金持ちになつたんよ、もういつペンやりなおそ。も、学校行かんでええさかい

秀雄 えつ、ほんまか

うた 何言つてんの、死んだ人にむこて

平三郎 秀さん、こつちおいで、一緒にお茶でも飲もう。

音吉 マツチの軸賭けて、花札しよ。

秀雄 (もじもじしながら)それが、こつちはしてられしまへんね。

音吉 急ぎの用事でもあるんか？

秀雄 8レースのあの世特別の締め切りがもうすぐやねん。ほな、さいなら(走つて下手に消える)。

ゆめ あほらし。
音吉 死んでもなおらんか。
平三郎 せやけど、人の一生どつちが幸せなんか、わからんなあ。
ゆめ 愚い切るように(音吉、マッチの軸かけて花札しよう)。

四人輪になる。

音吉 わあ、さんじつや。

平三郎 ちきしょう。

音吉 マッチの軸二本。

うた おもしろい？

平三郎 おもろない。音やんマッチの軸で鼻くそほじくんのんやめ。

うた うちの羊かんかけよか

平三郎 音吉、ゆめ (弾んだ声で)うん

暗転。奥が映画館の入口。日活ロマンポルノのポスター。支配人出てくる。おゆうさんが、切符のもぎりの椅子から立ち上がる。

支配人 あかん、あかん、今日も客のいりはパラパラや。これやったら、

城東館も長ないなあ。

おゆう 支配人さん、えらいすんまへん

支配人 あら、また、おゆうさん、嬉しそうな顔して。そう言ったら、今

日は水曜日かいな。はよ帰り、はよ帰り。旦那はんと今日はしつぽり。

おゆう もういややなあ、そんな年やあらしません。お茶のみ友達みた
いやから。

支配人 なにいつてんの、まだまだお若い、これからやないの。

おゆう ほな、何時もほんとに勝手ばっかり言つて。

おゆう支配人に頭を下げて舞台の中央に。

支配人 おゆうはんの嬉しそうな顔みたら、ああ、今日は水曜日やて氣
いづくわ。おてかけさんやいつの少しも隠さはれんなあ。旦那はんいつ
人も、あない喜ばれたら男冥利やなあ。(客が切符を出す。切符をも
ぎって)おおきに。

おゆう (舞台中央で立ち止まる)今晚なににしよ。何食べてもらおう、
週間ずーと考えてたのに、まだ、決まらん。ほんま、うちは阿呆や。

おゆう上手に消える。奥はバス。

おゆう下手から走って現れる。

おゆう　ゆめちゃん、ゆめちゃん。

ゆめ　おゆうさん、どっしたん(バスから降りる)。

おゆう　聞いてほしい、聞いてほしいねん。うち、悔しいて悔しいて。

おゆう、ゆめの袖を引き、少し前に出る。バスは消える。

ゆめ　気落としたらあかん。

おゆう　もう、それはええねん。だんさんに、最後まで付き添うことができたし。せやけど、うち、悔しいねん。たまらん程情けないねん。

ゆめ　どないしたん、何かあったん？

おゆう　もともと、お葬式は遠慮しよと思つてた。せやけど、長男さんから、電話かかってきて、葬式は遠慮してくれて、念おされたら、どんな気がする。信男さん、長男さんやけど、ええ人やと思つてた。お母さんもおらへんし、親父が一番氣い使わへんやろから、おばさん、たのんますて、頭下げられて、やっと、嫁のまね事できると……。ほてうち、一生懸命、世話をしたんや。なんや、やっと認められたよつな氣になつて。

（間）。うちを付き添い雇うかわりに使いよつたんや。そらええわなあ、お金いらへんよつて。

ゆめ　旦那さんに最後まで付き添えてよかつたやん。それだけでも、ええと思わな。

おゆう　せやろか？動けんよつになつて、喋れんよつになつて、押しつけられたんや。今日の電話で、自分の阿呆さがよつ分かつた。ゆめちゃん、うちはそんなよつ出来た女やあらへん。人を恨むし、嫉妬もする。旦那さんの奥さん、死んだらええのにと、何時も思てた。ほんとに死なはつた時は、自然と頬がゆるんで、しまりのない顔になつて、なんぼまともな顔しよとしても、笑つてしまつんや。うちはそんな女や。

ゆめ　誰でもそうや、おゆうさん、自分を悪ういふんはやめ。ほんで、貰うもんは、きちんと貰い。

おゆう　みーんな子供に分けてしもつて、なんにもあらへん。そついつたら、うちの家も狙われてるかもしれへん。

ゆめ　大丈夫やて、あの家は借家や……。

おゆう　……。
ゆめ　ごめん。

おゆう　やつぱり、葬式行く。うちの、うちの人の葬式、なんで、なんで、うちが行つたらあかんの。週に一回うちへ来て、殆ど黙あつて、手伸ばしたら、塀に触れるような小さい庭を見てた。うちが、家に帰つたら大きな庭があるのに、なんでこゝに来るのて、いけずして聞いたたら、小さいから落ち着くんや、おゆうがいるから、こゝろが静かなんやて。

（泣き伏す）。

ゆめ お葬式行くのはやめよ。ろくな事ないわ。

おゆう ゆめちゃん

ゆめ はい

おゆう どっちみちうちには、もとは今里の座布団芸者、幸せなんか遠い昔にあきらめてた。せやけど今は、泣かせて、思い切り泣かせて、もう、一人で泣くのんいやや。

おゆうゆめの胸にすぎる。暗転。奥『はバス。

平三郎 おゆうさんはあれから、うどん屋やらはったんやなあ。

音吉 ほんまに、はやらへんだ。

ゆめ 一生懸命手つとったけどあかんた。

音吉 旨なかった、ほんま、旨なかった。あない不味いのは、あの時からも食たことない。

ゆめ うたちゃんは優しいよって、おいしい、おいしい言うってうどん五杯も食べてお中こわしたんやてなあ。

平三郎 あたったんは、次に仕出し屋やって、食中毒だしよったぐらいや。

うた あの場所はなにやってもあかん、死に場所やてみんな言うた。

平三郎 最後はカラオケ喫茶。一生懸命うとてたなあ。

音吉 せやけど、おゆうはん音痴やった。

平三郎 それを本人がしらんのが悲劇やった。

音吉 おゆうはんがマイク持ったら、客が一人消え、また一人消え、ほんで、誰も来んようになってしもた。

うた 最後の喫茶店閉めてから、気落としてるやる思て、見に行ったら、返事があらへん。上がらしてもろたら、肩まできっちりとお布団きて、天井を見たはった。おゆうさん、何回呼んでも、返事があらへん。

音吉 3日もだあれも知らんでほつといたとは思われへんほど、きれいな死に顔やった。

ゆめ うちが駆けつけた時は、目開いてた。目閉じさせて、顔を拭いたげた。

平三郎 八方を手をつくしたけど、誰も親戚があらへんだ。旦那はんとこへも知らせたけど、うちとは関係のない人でっさかいいつ返事やった。

音吉 ほて、町内で話しおつて、骨仏に入れてもうたんやったなあ。

うた あの人の人生って何やったんやろ。

ゆめ あの人の、あんたの歌が好きやった。あんたの人も落ちてて、ひとつもつれへん歌やったけど、喫茶店のカウンターに頬杖ついて、ひとりでもいつも聞いたはった。

うた 歌う(ウエディングドレスなんか着たくない

ウエディングドレスなんか着たくない
あなたの手枕で、こつして眠るだけでいい
小さな部屋で、あなたが来るのを待つ方がいい。
ゆめ なんにも、自分で死ぬことあらへんのに、阿呆やおゆうは、おゆう
は阿呆や。

暗転。自動車が猛スピードでバスを追い抜いていく。

音吉 風ふうやんやないか。

風やん なんや、音吉にいさんか。

音吉 ぶつ、こいさんや。

うた うちらはいくつに見えるんやろ。

音吉 風やんど行くんや。

風やん めばちこできたよって、鶴橋の目医者行くねん。

音吉 お前も白髪が目立ってきたなあ。

風やん アホは年とらへんの、言いたいやろ。

平三郎 せやけど、風やんはほんま男前やなあ。

音吉 千代の富士みたいや。

風やん おおきに。

音吉 それで、しゃべらへんだら、ほんま、ようもてるぞ。

風やん こんなどいざ、いちびってんと、目医者い。あるときは、片目の
運転手、そして、その実体は、正義と真実の人、藤村泰造、ばん、ば
ーん。はいよシルバー、ローレン、ローレン、ローレン。

うた 気つけていきやあ。

風やん おおきに、ローレン、ローレン、ローレン(上手に消える)。

ゆめ えらいこつちや、鶴橋行くて言つてたなあ。風やん止めて。

うた ゆめちゃんどうしたん

ゆめ 鶴橋で、車にぶつかって、ほんで風やんは。

ローレン、ローレン、ローレンの小さな声。

音吉 風やん。

うた 自転車が、空を駆け上がっていく。

ゆめ 消えた。

ローレン、ローレン、ローレンの小さな、小さな声。一拍おいて、大
きく、ローライド。暗転。

ゆめ 軒下のバケツに植えた紫陽花がきれいなあ

平三郎 雨の日の紫陽花か……。花が光を含んでるようや。都会の下町に

は季節がないような気してたけどなあ。気がつかへんただけかもしれへん

うた ビルが溶けるように消えていく

平三郎 森ノ宮造兵廠跡が現れた

音吉 ほんま廃墟や、幽霊みたいや

平三郎 長い間、空襲におうたまんまの姿で放ったらかしにしたった

平三郎 音ちゃん、見てみ、廃墟と、京橋のネオンの海が一緒に眺められる

わ

音吉 どっちがほんまなんやろ

うた 大阪城が、きれいなあ。鬼はもう、眠てしもたんやろか

音吉 暑いなあ。

ゆめ うたちゃん、バスの外見てみ。(客席の方を見る)

うた えらい人通りや。

平三郎 何事やろ。

遠くで盆踊りの音。

ゆめ お盆や。

音吉 みんな白い着物きたはる。

平三郎 みんな楽しそうやなあ。

うた 一年に一回、帰ってきはったんや。

音吉 知ってる人いてるか。

うた うち、あの人知ってる。あつ、角曲がってしもた。

平三郎 わしは、人が多すぎて分らん。

音吉 ちよんまげ結うてる人もいてる。

平三郎 浮見町にこんなようけの人が生きてたんか。

盆踊りの音消える。

うた みんな、夜明けと一緒に帰って行かはった。

運転手 とうとう、二十代や、青春どまん中や。

平三郎 たいそに言うほどの青春やなかったけれど。

音吉 どっちかいつたら、暗い方やったけど。

うた、ゆめ うちらはちがつよ

うた こんなおはんくさい服いらん 服をはぎとる、下は真っ赤なワンピース

ゆめ みなさん、びっくりしましたやろ。けっけいっぺんや。

うた ミス大阪。

ゆめ ミス四丁目。

ゆめ、うた 結局、みんな、若かった。

平三郎 わしらも負けてられへん、髪の毛はふさふさ。

音吉 女の子にはもてへんだけれど。

運転手 荷物はよう持てた。

平三郎、音吉、運転手 結局、みんな、若かった。

バスのエンジンをふかす音。

平三郎 バスのスピードが上がったんちやう

音吉 あつ、親父や、自転車に山ほど酒積んで、汗拭きながら坂道をこいでる、親父の丁稚自転車、馬鹿にしたらんだらよかった。ライトバンで運ぶより、酒の重さよう分かったやろう。このころは、女に狂て二十回も勘当されとった。

ゆめ うん、町の様子がどんどん変わっていく。万博まであと30日

うた うちの家が現れた。あの文化住宅、うん、あの長屋。新建ち言つたんや。あつ、清次がいる。清次さんがうちに会いに来たはる。降ろして。

音吉 行ったらあかん、行ったら、不幸になる。会いとうないて言つてたやんか

うた お願い、とめて、降ろして、降ろして下さい。

音吉 叩ぶ(ぶ)行ったらあかん。

バスの止まる、ドアが開く。駆け出すうた、追いかける音吉。

平三郎 何処へ行くんや。

音吉 決まってるやろ。うたを止めるんや。

平三郎 なんで、好きやといわへん。

音吉 わしは、いじめっ子の音吉、助平の音吉、それでええ。せやけど、清次は、うたを不幸にする。流れ者もにうたは渡されへん。

平三郎 お前の百年の片思いも辛いやろつ。せやけど、うたは、死ぬほど清次に会いたいんや。それがあの子の恋や。

音吉 やかましいわい。

平三郎を振り切って、音吉バスを飛び出す。バスのドアの閉まる音。奥の幕が閉まる

音吉 バスが消えよった。ここは何処や。

奥、ストリップ劇場。音楽、野次が幕越しに聞こえてくる。下手から、肩を落としたうたがでてくる

うた 音さん。

音吉 うたちちゃん。

うた あの人、見失のうた。

音吉 ええやん、バスに帰る。あつ、歌の出たたストリップや。

うた ほんまや、あんた、よう来てたなあ。ほんで、いつもうちの出番になるど、こそこそ逃げ出して。意気地なし。

音吉 あほ、お前の裸なんか、見たないわい。

うた 嘘つき。見たかったくせに。

音吉 ようし、ほんなら、今見たる。幕から入るうとする（

うた そんなあかん、卑怯もの。

幕が開く。

音吉 なんや、ストリップとちやう。

うた あつ、ここは通天閣の小屋や。七つの時から、お父ちゃんに連れられて、祭りや芝居の舞台に立って、歌うたてた。うちは浮見町の歌姫。清次はやくざのヒモ。稼いだけどもって行かれた。

奥『舞台』に、司会者登場。

司会者 下町の歌姫の登場です

拍手、客のかけ声

うた(子役) オーマイ パパ 帽子を横つちよにかぶり おどけていた

やさしい 私のあのパパ オーマイパパ 帰らぬパパ

大きなあの手てに抱かれて、夢見た…

歌声が遠くなる。奥『暗転』

音吉 あつ、真っ暗になった。(叫ぶ)うた。

駆け出した音吉、どーんと手品師にぶつかる

手品師 ぼん、大丈夫か。

手品師の手に子役のうたが。

音吉 ぶつ、ぼんやて。わしは百才や。なんやここは。手品師のおっさんの

大きな影の手の先に、ほんま、ほんま、小さい女の子がぶら下がって
る。

うた 音吉の背後から（ あれ、七つ時のつちや。

音吉 いっぺんにそんな頃に来てしもたんか。

うた うん。うちが浮見町に来た晩や。

音吉 あん時、初めてあんたに出おたんや。

野球の実況放送が家から、漏れてくる。そして、遠ざかる。 奥、
石井さんの家。家の上手に石井さんの影。

音吉 石井さんの家や。ずいぶん長いこと空き家やった。

うた うちらの子供の時から空き家や。あれ、石井のおじいさんがいた
はる。

音吉 そんなアホな、おじいちゃんは、わしらの子供の頃死んだんやで

うた ほんだら、あれ誰のかけ？

音吉 さあ

うた こわい話あったなあ。晩におしっこ行くのん怖かった。

音吉 息子が若うで死んでから、近所の誰ともつきあわんで、息子の嫁
と二人で住んだはった。

うた あのちいぢやな家で、何があったんやろ。

音吉 そのうち、嫁もころっと死んでしもた。葬式の晩、町内の人が、数
珠忘れたんに気ついて、石井さんの家に引き返したら、見たんや、ポリ
ポリポリ。骨壺抱いて、おいしいでこれ、妙子の味する。ポリポリポ
リ、見たなあ。

背後に石井さんの影。かっぱれを踊り出す

うた きゃあーあつ、おじいちゃんの影が踊りだした。カッポレや。

音吉 カッポレカッポレ甘茶でカッポレ

音吉、影と一緒にになって踊る。暗転。石焼き芋の声。ハモモ万の
音。

うた 音ちゃん、うちらだけ、先へ先へと行ってるんと違う。もうバスには

戻られへんねやろか。迷子になったんやろか。うち怖い。

音吉 大丈夫やて、わしがいる。あれ、あんたのお父さんや。

物干し竿の声。遠く離れて傘、修繕の声。軒下の風鈴。 奥』は手
品師の家。手品師が座っている二人が覗き込む

うた ここがうちの家や。お父ちゃんがいる。ほら、この窓から覗いてみ。

音吉 いたはる。ほんまに大きな人やなあ。座ってたら、畳一枚ぐらい場とったはる。この熱いのに燕尾服を着て。

うた あの服の下に、いっぱい手品の種を仕込むんよ。音ちゃん、あの人、うちの本当のお父ちゃんとかがうねん。手品師にするつもりで旅の一座からもろつてきはったんや。

手品師 お前、ぶきちよで、手品はあかんけど、歌が上手やなあ。下町の歌姫や、ふっ。

うた 殆どしゃべらんと、大きな体を申し訳なさそつに小さくして、お酒を飲むのだけが楽しみやった。酔うと、指先から、次々とランプが出てる。まるで、美しい夢のようや。

音吉 あっ、シルクハットをかぶらはった。

うた 出かけるみたいや。

音吉 ついて行くっ。

町のざわめき

うた デパートへ行かはるんや。足が弱って、地方へはもうよう行かはらへんだ。せやけど、遊園地やデパートの屋上で、子供ら相手に手品するのがものすこつ楽しそつやねん。

デパートのざわめき。『唄』が舞台。

子供A(倉) わあ、鳩や、すこいなあ。

子供B(倉) 今度は、白いのんちこつて、飴色のんだして。

手品師 飴色のんは、ちよつと旅に出て留守なんや。かわりに、こんな花をあげよ。

女の子の泣く声。

女の子の母親(倉) すんません。この子にも貰えませんが。兄妹で喧嘩してても。

手品師 ああ、かまへん、かまへん。ほら、いくつでもでるんや。うた、あの子にあげて。ほな、後頼むで、ちよつと疲れたよつてあしよりに座つて聞いてるわ

手品師が舞台から降りる。子役のうたが舞台に。

うた りんごの花びらが

風に散ったよつなあ

手品師(眩くよつに) 月夜に、月夜に、そつと…。

子供A(倉) おっちゃん、どつしたん。なあ、おっちゃん。

うた(子役) お父ちゃん、お父ちゃん

うた お父ちゃん、お父ちゃん。子役の声と重なる。(

暗転。野球の実況放送が家から、漏れてくる。そして、遠ざかる。
犬の遠吠え。

うた おとうちゃんが死んで、うち、みなし。音ちゃん、手つないで。

音吉 間(うん)。

数人の子供の走る足音が二人を抜き去って行く。(倉と音)

子供の声 あつちやど、旋回しとる。ホイラーン。

音吉 トンボつりや。まだ空き地がよつけあつた。

チャルメラの音。

うた 音吉ちゃん、何してんの？

音吉 躑りながら(蛤をセメントで、擦ってんねん)。

うた 貝笛作ってんの？

音吉 せや、こないして、貝の背中擦ってたらな、穴が二つ開きよるんや、ほたら、唇に当てて、吹くんや。あいた、指こすってしもた。

うた えらいこつちや、血出てるやん。うちが吸うたげる。

音吉 うたちゃん…。

うた 音吉ちゃん、貝笛吹いて。

貝笛、曲は「ふるさと」。バスの近づいてくる音。

うた あつ、バスや

バスが止まる音

全員、子供になつている。

ゆめ うんちゃん、早よう、早よう

運転手 はあーい、直ぐ行くよつて、配つていて

ゆめ (トランプをくぼりだす)ね、うんちゃん、分

平三郎 うんちゃん、うんちゃてあんまりええ響きやないなあ

運転手 やって来る。

音吉 おまえ名前なんや？

運転手 笑わへんか？

音吉 笑わへん。

運転手 秀乃進^{ひでのしん}。

一同爆笑。

音吉 ええ名前やんか、平三郎よりましや。

運転手 せやから、うんちゃんてええ言うてんね。親づらむわ、今まで滅多に名字呼ばれた事あらへん

うた ほんなら、うちからいくで

平三郎 トランプもおもしろいけど、これ、終わったら、缶蹴りしよう

音吉 探偵ごっこがええ

秀乃進 立ち上がる。

秀乃進 あるときは、片目の運転手、そして、その実体は、正義と真実の人、藤村泰造、ばーん、ばーん。

音吉 将来はバスの運転手。

ゆめ うちら、ここが、ふるさとなんやなあ。小川もなければ、森もないけど

平三郎 路地ばっかりの町やけど

うた 帰って来るとしたら、ここしかないんや

音吉、貝笛をふく。こはんよーという母の音が、4回、ゆめ、うた、平三郎、音吉が、それぞれに答え、下手、上手に分かれて消える。秀乃進、周りをきよるきよる見渡す。

秀乃進 肩を落としてわし、ここの子、ちやうもんなあ。

秀乃進 下手に向かってトポトポ歩きながらわし、何処の子やねんやろ？

音吉が置いていった貝笛を拾う。貝笛を吹く。こはんよーの声、勢いよく振り返るが、また、うなだれて、歩きだす。秀乃進、こはんよーの声。秀乃進、驚きと、喜びと、涙の入り混じった表情で、客席の方を向く。

秀乃進 ええ名前やなあ、秀乃進。

暗転。バスの中。

ゆめ 小学校の頃、まだ、浮見町に一箇所だけ、たんぼあった

うた ものすごい怖いお百姓さんが住んだはった

平三郎 鍬振り上げて、追いかけられた事もあった

音吉 本気やったぜ、あのおっちゃん

うた たんぼも、怖いおっちゃんも、あつといつ間に消えたけど、空き地はまだ、ぎょうさんあった。ほら、あそこにも、あそこにも。

平三郎 夏の夕方になったら、トンボつりする子供が、並んで、ポケーと西の空を見とった。

平三郎 トンボつりの期間はふた月もなかった。盆がすぎたら、もう、あかん、赤トンボが舞だしたら、終わりや。

音吉 しつづに、秋風吹いても、空き地の真ん中でポツーンと立って西の空見とった。あほ、今くる来るかいな言いながら、言った奴も、自転車止めて西の空一緒に眺めてた。あいつらみんな、あれからどうなっただんやろ。

運転手 ぼく、このバス降りたる

音吉 運転手が降りてどうするねん。あんたが連れてきたんやんか。まあ、降りても、また、90年、やり直すか。わしはもうええ。おかあちゃん、あつたかい腹の中に戻るほつがええ。

運転手 そうやなあ、ぼくもやめや。もう一回やり直しても、やっぱり、おんなじ運転手になるやろし、同じ道歩いて行く気がするわ。しょうものうても、それが自分の人生やから。

ゆめ そらしゃない。生まれてくるのも死んでいくのも結局は一人やから。

うた せやから、生きてる内は、傷つけおつても、人と手を繋ごうとするんやろうなあ。

平三郎 大阪城の石垣に、鬼が座ってる。

ゆめ 鬼には、時の流れは関係ないんやろか。

平三郎 なんや、寂しそつやなあ。

音吉 わしらこれからどないなるんやろ。

ゆめ どんどん、小さくなつて、おかあちゃんのお中に戻つて、それから……。

うた ふつと、消えるんやろか?。

平三郎 死ねといつことは、そんなんかもしれへん。ほんま、人の一生て、一時の夢みたいなもんやなあ。

うた はよ、おかあちゃんの、あつたかいおなか中に戻りたい。おかあちゃんにやつと会える。

ゆめ (客席の方を指さす)あれ、うちらとよつ似た子供が向こつから

やってくる。

平三郎 いや、あれは、わしらや。わしらの子供の頃や

音吉 わし、みんなからちよっと離れて、ポケットに手つこんで肩いからして歩いている。

うた 音吉に頭叩かれた。あいた、何で叩くのかわいそうだ。

ゆめ こっちに来るにつれて、年がいつてくるようや。うち、中学生になった。無邪気やったなあ、あの頃。

音吉 一千七面の平さんが、女学生と話してる。

平三郎 あれは、わしの夢や。結局は一言もよじしゃべらんだ。

音吉 うたちゃんや、透き通るような美人や。

うた うち、二十歳、せやけど、あんまり楽しいことはなかった。

ゆめ 花嫁衣装のうちがいる。

うた きれいで、ゆめちゃん。

ゆめ おおきに、うちらに近づいてくるほど窓の外のうちらは年をとる。

音吉 百才にちこつなる。

ゆめ あれは、お金を一枚一枚勘定している金貸しのうち。

平三郎 あれは、電卓得意な人差し指の平三郎。

音吉 客より先に酔っぱらう、酒屋の音吉。

ゆめ ふっ、うち、ひ孫を抱いている。

平三郎 米寿の平三郎。

音吉 百…。

平三郎 あれがわしらの一生や。さあ、バスを降りて、迎えに行つたろ。

ドアの開く音。四人がバスを降りる。四人にスポットライト。

うた あれ、バスが消えた。

バスのとまる音。暗転。最初の場面。

うたを除く四人が観客席の方を見て立っている。うたは座りこんで動かない。

警官 遠くから(もう、お帰りか？今日もバスはきませんでしたか。

ゆめ あっ、おまわりさん。なんや、一郎さんかいな。

平三郎 近くの交番に勤めてるのに、時々帰つたらんかいな。

警官 なんやかやと忙しい。

音吉 まあ、盆にでも帰ってくるんはええとせな。うちなんか、何年も帰つてこんわ。猫や犬が家族や。あれ、指の先けがしてる。何時したんや

ろ、血も出てる。それと、何か言うこと忘れたみたいない気するなあ。誰か知らんか？

平三郎 ゆめ 知らん

ゆめ 一郎ちゃん、あんたとこの隣の家、昨日の雨でつぶれたぞ。

警官 だあれも住まんようになって三十年、崩れても不思議やないなあ。

ゆめ ほな、ほち、ほち、去のか。

平三郎 なんぎやなあ、うたちゃん寝てしもてる。

うた うーん、よう寝た。伸びをして立ち上がる。うたの服はそのま
ま(あれ、みんな帰るんか、ちよつと待って。なんやこれ、うちの足下
で、うちが寝てる。

ゆめ うたちゃん、帰るぞ、起きや。どうしたんうたちゃん。みんな、み
んな、はよ来て、うたちゃんが、うたちゃんが。

うた なんや、うち、死んだんかいな、それにしても、みんな慌てて。音
吉なんか、あれあれ、泣いてくれて。おおきに、みんな。

音吉 命ぶ(うたちゃん、わいは、わいは、あんたが好きや。

うた おかしいなあ、泣きながら、音吉がなんか言ってる。もう、うちに
は聞こえへんよおお。体がかかるうなった。死ぬ死ぬって怖がってたけ
ど、こんなもんかいな。うちの百年、面白かったなあ。あれえ、バスが
来よった。うち、まだ、夢みてるんやろか？陽炎がたってる、そんな中を
バスが揺れるようにして、やって来る。ほら、ほら、ほら。

幕

平成9年9月20日 了